
貪食IS-Gaping IS-

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貪食IS - G a p i n g I S -

【Nコード】

N 4 7 0 9 Y

【作者名】

水深無限風呂

【あらすじ】

悍しい姿の異形となった朽ちぬ古龍の子孫『貪食ドラゴン』^{おぞま}。

数々の不死者を食らい尽くし、貪り尽くしてきた存在。

そんな貪欲の塊とも呼べる存在が、ある一人の騎士を殺し、人間性を得たところ。

実に奇怪な文章を白い光に見ることとなる。

その奇怪な文章とは——『人間となり、別の世界へと侵入します』

——というもの。

そして次に貪食ドラゴンが目を覚ました時には既に以前の悍しい姿

はどこにもなく、貪食ドラゴンの姿は可愛らしい少女のものとなっていた――。

――この話は、匠も腰を抜かす劇的ビフォー&アフターを終えた貪食ドラゴンと、そんな彼女を親切心からつい拾ってしまった厨二病の抜けきらない平社員とか、未だ厨二病の抜けきらない変態企業の社長とかの物語――。

ダークソウル界のアイドルこと『貪食ドラゴン』がISの世界に転生する話。ゆるほわ貪食系を目指して頑張ります。

厨二病の抜けきらない平社員は特に出番多くありません。原作でいう五反田弾程度です。

変態企業の父親はそんなに出番多くありません。原作でいうクラリッサ程度です。

ブローグ 最後の生贄（前書き）

今回は何かブローグなんで殺伐としてますが、基本的にゆるほわ
貪食系で行くつもりです。

ゆるほわ貪食系がどんなのかは知りませんが。
まあ。

何がともあれ、ハイスピード学園貪食系ラブコメディ、開幕です！

プロローグ 最後の生贄

血とヘドロと汚物、更には忌々しい呪いの息が充満する『最下層』。

全ての不要物の辿り付く場所であり、全ての迫害者がその一部となり、肥大し続ける世界の死体。

全ての生を受けし者が名前を呼ぶことすら拒み、行く事となれば自害を選ぶほどに拒否され続ける場所。

そこに向かうは偽りの使命に駆られた迫害者——生持たずして人の形を模る『不死者』——のみ。

不死者は幾度と死のうとも呪いにより蘇り、永遠の苦痛を味わい続ける。

そして、その末には思考することを放棄し、本能がままに動き続ける機械人形——亡者と化す。

亡者となれば、世界の終るその日まで永遠に何も考えず、何も感じず、死んでも、殺されても、分解されたとして生き返り続ける。

愚かな不死者共は亡者となる前に与えられた『使命』を果たそうとする。

使命を果たすには二つの前準備が必要である。

一つは、朽ちた不死者共の教会に取り付けられた鐘を鳴らすこと。

そして二つは、世界中の不要物を溜め込んだ最下層の更に深層。

疫病と猛毒ばかりが充満する瘴気に満たされた汚染所、病み村の最奥に存在する鐘を鳴らすこと。

数々の不死者はその試練に挑み、多くは教会の鐘を守り続けるガールゴイルの手によって消し炭と化すが、ごく稀に一部。上の鐘を鳴らし、下の鐘を鳴らさんとする者が現れる。

——だが、未だに下の鐘が鳴り響いたことは一度もない。

それ以前に、ある日を境に病み村に辿り付く人間はぱったりと居なくなつた。

何故か。

理由は至極単純である。

病み村への門を開く鍵を飲み込んだ『貪食ドラゴン』の存在である。

貪食ドラゴン——ウロコのない白竜『シース』の裏切りにより世界各地に散らばった朽ちぬ古竜の子孫。

だが、その姿は多くの神話で語られるような恐ろしくも神々しいその姿とは懸け離れている。

理由は単純明快。住み着く場所が『最下層』だったからだ。

食物と呼べるような物など一切なく、腐肉と汚物を貪り尽くすしかない。その汚らわしい世界に神々しい古竜の体は徐々に蝕まれ。

結果。

その姿は胸から腹に掛けて大きく裂け、そこに大きさの揃わぬ不
出来な歯を無尽蔵に並べた大口を持ち、更には竜の出来そこないで
ある『蛇』にも似た体を持ち、六本の足従^{おそま}わせ、背中には劣化の始
まっている四枚の翼を持った、非常に悍^{おそま}しい異形へと変貌した。

更には『不動』と呼ぶにまさに相応しい性格は失われ、ありとあ
らゆる物をいじましく貪り尽くす誇りなき性格へと豹変している。

言うならば、亡者と化した古竜。

そんな存在が病み村の鍵を飲み込み、以後流れ的に守護し続けて
いる。

体は瘴気に蝕まれ、全てを焼き尽くす熱の吐息は失われたとはい
え、その強靱な肉体と巨大な体は全てを圧倒し、何人たりとも寄せ
付けない。

更に最悪なのはその習性だ。

目に付いた物は何であろうと、貪り付くし、噛み砕き、飲み込む。
普通の人間ならば即死で終わりだろう。

だが、不死者はこの貪食ドラゴンに挑み続ける限り、何度でも噛
み砕かれ、飲み込まれる体験をしなければならない。

それは体は朽ちぬとは言えど、心は死ぬ不死者にとって最大最悪

最強の武器である。

そんな最強にして、最悪であり、劣悪である貪食ドラゴンへと、
今日も一人愚かな不死者が挑む。

その名は『受け流しヴァレンティーン』。不死者となる以前は百
戦錬磨の騎士であつた。

彼はその異名通りに敵の攻撃を左手に持つ『バネ仕込みの盾』を
使つて見事に受け流し、がら空きの体に右手に持つ『貫きの剣』に
よる致命の一撃を放ち、全ての敵を一撃で葬り去つてきた強者であ
る。

その腕は不死者になつてからも朽ちることはなく、亡者共の攻撃
は当然。鐘を守護するガーゴイルの攻撃すらをも受け流し、一撃で
仕留めて来た。

——今日も抜かりはない。

誰しもが一度も勝利したことのないと言われる貪食ドラゴンへと
挑む寸前になつても、ヴァレンティーンには不安などは一切存在し
ない。

存在するのは圧倒的自信と、途切れることのない集中力、そして
溢れんばかりの力であつた。

そんな彼は貪食ドラゴンが待つ大広間への入り口を塞いでいる白
い光に触れようとして、壁に橙の助言ろう石——不死者同士がそ
の先の情報を壁や地面に書きこみ、お互いを助け合い、また騙しあ
う道具だ——で書かれた文字を見て、思わず苦笑した。

その文字とは。

『この先かわいい奴あり』。

——脳みそまでカビたか。それでよく生きられたものだ。

そこまで思い、ふと、再び苦笑する。

——すでに生きてはない、か。

自分の置かれた状況を再確認したヴァレンティーンは緩んだ集中力を引き締めなおし、ゆつくりと白い光の中へと入り込んでいく。目の前に広がった光景に、思わずヴァレンティーンはもう一度気を緩めてしまう。

壁には大きなヒビが入り、そこから求め続けた太陽の光が差し込み、床に広がる汚水を照らし、乱雑な彩色を浮かび上がらせ。数々の戦闘で崩れた柱が不規則に影を生み出し、その影は一つの芸術品のようにさえ見えた。

なんとも退廃的で、なんとも神秘的だ。

思わず「ほう」と息を吐いたヴァレンティーンだったが、直後、再び気を引き締めなおす。

大広間の最奥。崖となつて汚水を下に吐き出し続ける穴場から巨大な蛇の頭のようなものが此方を覗いていたからだ。

その頭はヴァレンティーンを見つけると、左右に振っていた首を止め、ヴァレンティーンを強酸性の液体のような毒々しい黄金の瞳でじいつと睨み続ける。

無機質で死に続けるような瞳に睨まれても、ヴァレンティーンは微動だにせず、ゆつくりと戦闘体勢へと移る。

——グオオオウオオオ……。

猫が喉を鳴らす音にも似た醜悪な音を鳴らしつつ、貪食ドラゴンは人の手にも似た不気味な六本足を器用に動かし、深淵の底から這いずり出てくる。

——グオオオオガアアアアアアアア！

まるで悲鳴のような雄叫びと共に貪食ドラゴンは這いずり出、その巨大な全身をヴァレンティーンに惜しむことなく晒すと。

——ガアアアアアアア！！

大きく体を仰け反らせ。

その名前の由来ともなった。

貪食者の象徴である大口を。

貪食竜の大口を惜しみなく開いた。

数多に並ぶ牙、舌等一切なく、噛み砕くことしか考えておらず、直接気管支へと繋がっている大口。

ヴァレンティーンは右手の貫きの剣と、左手のバネ仕込みの盾を強く握りなおし、駆ける。

——ヴァレンティーンの武具は確かに特殊なものだが、鎧自体は上級の騎士なら誰でも所持しているであろう一般的な防具だ。

神の加護や特殊な力も込められておらず、あの巨体——あの大口での攻撃を食らえば即死は免れないであろう。

だが、ヴァレンティーンは雷光の如く掛け、僅かな時間で貪食ドラゴンとの距離を詰める。

狙うはその大足。

コレほどの巨体を支えている足だ、多少のダメージを与えれば、後は自己負荷でダメージは幾らでも蓄積されるだろう。

それがヴァレンティーンの考えであった。

右手の貫きの剣で雷撃のような突きを貪食ドラゴンの支える足の一つに食らわせる。

——が。

刃は通らない。

——何？

現状をヴァレンティーンが飲み込む前に、貪食ドラゴンはヴァレンティーンへと倒れ掛かってくる。

当然、避け切れず、その巨体の下敷きとなる。

直後にヴァレンティーンの全身を襲う激痛。

数箇所には鋭くも鈍い歯が複雑に突き刺さっている。

そこまできて、ヴァレンティーンはようやく理解した。

貪食ドラゴンが不敗たる所以を。

その異形の姿にばかり気を取られて、誰もが知らなかった理由。だが、それはよくよく考えれば実に簡単に推理できることでもある。

——古竜のウロコは、岩よりも硬く、また、傷つかず、古竜が朽ちるのを阻害しているものだ。

そして、この貪食ドラゴンもその古竜の子孫であり、多少は劣化しているだろうが、そのウロコは非常に堅甲だろう。

……更に言えば、弱点となりえる足には当然その絶対数も多い。ならば、ヴァレンティーンの攻撃が通らないのは至極当然の出来事であろう。

——何を馬鹿なことをやっているんだ、私は……。

ヴァレンティーンが自分の過ちに気付いたと同時に、貪食ドラゴンは再び悲鳴にも似た空気を振るわせる雄叫びを上げた後。

倒した体をそのままに、地面を這いずり始めた。

ヴァレンティーンは貪食ドラゴンの巨体と、凹凸の激しい地面に挟まれ、すり潰されて行く。

それは非常に、そして異常な痛みをヴァレンティーンへと刻み付ける。

——だが、ヴァレンティーンは最後の足掻きをする。

——ウロコで刃が通らないなら——。

感覚などなく、痛みだけを無造作に伝えてくる右手に力を入れ。

——ウロコのない口腔内を狙えばいい——。

強く握った貫きの剣を、勢いよく目の前に広がる血のようにどす黒い赤色をした肉に突き刺す。

剣は容易く根元まで沈んで行き、ヴァレンティーンを飲み込まんとばかりに大量の赤を噴出す。

普通の生物なら明らかに致命傷であろう。

そして、ヴァレンティーンは苦笑する。

——こんなバケモノ相手でも、致命の一撃で倒せるとは。つくづく私は運がいい。

内心で苦笑しつつ、ある事に気付いた。

……貪食ドラゴンの動きが一向に止まらない。

まるで、ダメージを受けていないかのように。

そう、確かに普通の生物なら致命傷だろう。

——だが、朽ちぬ古竜に急所は存在しない。

たとえ、剣の一本が突き刺さろうと突き刺さらんと、なんら変わりはない。

その事に気付いたヴァレンティーンは思わず焦りを覚えた。

ここまで身を挺した一撃を食らっても怯みもしないことに。

本当に倒せるのか？

そう思った瞬間に、ヴァレンティーンの下半身に一際大きな牙が突き刺さり、遂に千切れる。

声にならない叫びをヴァレンティーンは上げるが、誰も聞くものは居ない。

次に右手、次に左手、次に首下。

普通の人間なら即死のダメージだが、不死者であるヴァレンティンは頭が無事な限り生き続ける。

どのような苦痛を浴び続けても、永遠に。

だが、その永遠は長くは続かず、ヴァレンティンの頭は起き上がった貪食ドラゴンの足によって熟れ過ぎた果実のように容易く踏み潰された。

瞬く間の静寂。その静寂は貪食ドラゴンの勝利を示していた。

そして、踏み潰されたレヴァンティンの頭から黒い精が現れ、貪食ドラゴンへと吸い込まれていく。

それはレヴァンティンが数々の亡者共から抜き取ってきた『人間性』。

生命の全てである『ソウル』とは別に人間にのみ存在するモノ。

その人間性が貪食ドラゴンの体に入り込んだ瞬間。

貪食ドラゴンの体に異変が訪れる。

巨大な体中に幾何学的な紋章が走り、肉体に刻まれ、赤く燃える。だが、不思議と貪食ドラゴンは痛みを感じず、ゆっくりと眠りに着く様にうずくまる。

そして、貪食ドラゴンの体はゆっくりと透けていき、そのうちに以前飲み込んだ病み村への鍵がコトリ、と地面に落ちる。

それは、肉体の消失を意味していた。

次には貪食ドラゴンの視界がだんだんとぼやけ、白い光に包まれていく。

そんな光の中に貪食ドラゴンが見た物は、人間性とよく似た黒い文字で書かれる――。

『――人間となり、別の世界へと侵入します――』

――実に奇怪な文章だった。

ブローグ 最後の生贄（後書き）

受け流しヴァレンティーンの出番は終了。お疲れ様でした。

01 - 親方、裏庭に女の子が（前書き）

主人公が如き脇役の登場。そして厨二病の旋律。

01 - 親方、裏庭に女の子が

「……帰ったぞ」

玄関のドアを開けつつ、男が声を発する。

だが、家の中は人が居るところか明かりすら点いていない。

理由は単純明快。

この男が一人暮らしだからだ。

一応それなりの大きさの一軒家に住んではいるが、同居人は誰もいない。

一人で暮らすには実に広すぎる家だった。

だが、アパートやマンションなどは彼の性に合わなく住み心地が悪い。
悪い。

だからこの孤独にも耐えるしかない。

そう再び思いつつも、男——さくさき なおき朔咲尚紀は明かりを点け、身に付けていたスーツを乱雑に脱ぎ捨て、ソファへと深く腰を沈める。

(……ニュースでも見るか)

尚紀は何気なくテレビの電源を入れ、適当にチャンネルを回してニュースを映す。

「——グリッグス大統領は自分の容疑を否認し、それに対してペトルス評議員は——」

移った画面には幸薄そうな大統領と、キノコ頭のブロンドの悪人顔の男が何やら口論している場面が映る。

それだけなら軽いコメディにも見えるが、どうやらニュースの内容は政治関連のモノらしい。

そしてそれは、尚紀の最も得意とするニュースであった。

ニュースを目にした途端。尚紀は落胆したかのような表情を浮かべ、ゆっくりとポケットから携帯電話を取り出す。

そして、電源の入っていないソレをゆっくりと耳に当て――。

「……俺だ、どうやらグリッグスがまたミスをしたらしいな。本当にアイツはアテになるのか……？ 何？ フツ、まあいい……お前がそう言うんだから間違いはないのだろう。ああ、任せろ。……では、また連絡する。いつもの合言葉か？ 忘れるはずがないだろう？ ……炎の導きを……アンバサ」

もう一度説明しよう。

尚紀は一人暮らしであり、同居人もおらず、実は後ろに友人が……ということもない。

では、この行動は何なのか？ と言われれば答えは一つしかない。

“特に意味はない”

満足げな表情をしつつ、尚紀は耳に当てていた携帯電話をポケットへと再び捻じ込む。

そしてそのまま、訪れる虚無感に身を任せていたところ――。

「……？」

ぼとり、と庭の方で何かが落ちてきたような音が聞こえた。

「なんだ……？」

小鳥程度が落ちた音の大きさではない。

少なくとも40〜30kg程度の重さのモノが落ちた音だ。

……一体何が？

得たいの知れない恐怖、そして怖いもの見たさ。二つの相反する

感情に尚紀は揺らぐ。

—— 見に行くべきか。行かないべきか。

じつくりと悩み、そして、父親がよく口にしていた『虎穴に入らずんば虎子を得ず』という言葉思い出し、決心する。

尚紀は立ち上がり、音の発信源である裏庭へと懐中電灯を持ってゆつくりと進む。

（もしも、この世のモノとは思えない超不気味な怪物が居たらどうしよう……いや、馬鹿。そんなのありえるわけないだろ。きっと鷹とか鳶とかが雷に撃たれて落っこちてきたただけだ。うん、そうに違いない）

どちらもどちらとて在り得ないシチュエーションだと思えるが、ある意味どちらも有り得る。

何せ、この世に在り得ないことなど存在しないのだから。

だが、尚紀は父親の『虎穴に入らずんば虎子を得ず』という言葉を再び思い出し、勇気を持って裏庭へと続くドアを開け放つ。

そして、懐中電灯を忙しく当たりに照らして『落ちたモノ』を探す。

その手は明らかに震えており、また、その行動から焦りと恐怖心も伺える。

なんとも弱い男である。

そんな尚紀が大きくライトを振った一瞬。

草むらの影。一部だけ不自然に黒い部分を尚紀は見つける。

おかしいと思い、再び尚紀はライトを向ける。

そうすれば黒い部分は穴などが開いているワケではなく、光を反射してカラスの羽のような紫色を所々見せる黒色の何かだと尚紀は気付く。

恐らくは、これこそが先ほどの音の原因なのだろう。

その色から尚紀はカラスか何かかと判断し、ゆつくりと近づいて

いく。

ある程度正体が見えたからか、尚紀は先ほどまでの恐怖を振り払ったかごとく、堂々とした足取りで進んでいく。

そして、尚紀が『ソレ』に手が届く程に近づいた時。

「なっ……あっ……!？」

ようやく尚紀は『ソレ』の正体を把握する。

カラスのような光の反射によって所々紫色に光る黒髪の『少女』だ。

回りの暗さ故に顔しか見えないが、その肌は美白を通り越して病的な程白く、血色も余りよくない。

それを見て、尚紀は不謹慎ながらも以前見た『世界一美しい死体』を思い出してしまう。

(……生きてるよな？ 生きてるはずだ、生きてないなんて許さない……いや、許さなくてどうする！ 生死はどちらでもいいから取りあえず家に運び込むしかない！ 死体が庭にあったなんてことが公になれば俺は——ッ！)

自然に発見されるまで放っておき、発見されても『知らない』の一点通しでなんとかかなりそうなものだが、パニック状態となった尚紀はそんな事は考えず、目の前でぐったりと倒れる少女を担ぎ上げ、小走りで家の中へと掛け戻る。

裏庭、玄関の鍵を何度も確認し、完全な密室を作った事を確認して、ようやく尚紀は肩に担いだ少女をソファへと下ろす。

……そして、下ろして気付いた。少女が一糸纏わぬ姿であることに。

思わず尚紀は一瞬、考えることを止める。

「……おい、どういう事だよ……なんなんだよこれえッ！」

そういうことである。

ガンツとテーブルを右手で思いっきり殴った尚紀だったが、そんな天の声が聞こえたような気がして、気を落ち着ける。

そして、テーブルを強く殴ったために痛む右手をさする。

「……………」

死んだかのように眠る少女は、これだけの音が鳴っても動じない。

……本当に死んでるんじゃないだろうな？

そんな考えが一度だけ過ぎるが、それを尚紀は頭を振るようにして振り払い、もう一度目の前の少女をじっくりと観察する。

……精巧な人形のように『過ぎる』ほど整っている顔。

……雪のように白く、血すら通っていないかのような肌。

……皆無と言ってもおかしくない胸の厚み。

……抱き締めやすそうな、いや、もはや抱き締めることを前提に作られたかのような体つき。

……躍動感溢れる少女の手足とはまた違った、背徳感と加虐心を掻き立てる弱弱い手足。

「……………」

その目の前に存在する『人形のような』少女を見て、尚紀は黒い思考を思わず浮かべる。

「…………ッ！」

尚紀は思わず自分の最低な思考に反吐が出そうになるが、何とか堪え、最寄の壁による。

そして手を壁に付けて一度深呼吸し――。

「俺はロリコンじゃないッ！ 親父とは違うッ！」

この二つの言葉を延々と吐きながら壁へとドンドンと頭を叩きつける。

―― 軒家暮らしでよかった！

つくづくそう思う尚紀である。

八度ほどこれを繰り返したところ、ようやく尚紀の思考は落ち着き、『衣類が無ければ買えばいいじゃない』というどこかの悪女のようなことを思い浮かべる。

思い浮かべたら後の行動は実に素早く、財布を片手に外へと飛び出す。

そして買って以来使った回数が二桁に達していないマウンテンバイク（音速の流星群）にまたがり、最寄の服屋を目指して全速力でペダルを漕ぐ。

大体十分ほど漕いだだろうか。

遅い時間で幸い走っている車も少なく、体力を余らせた中学生のような乱暴な運転でも事故一つ起こさずに尚紀は“走行中に両足が攣る”という日頃の運動不足から来たアクシデント以外は何事も無く無事に服屋へと辿り着いた。

「ハアー、ハアー……」

荒い息を吐きながら、服屋の前で尚紀は肩を上下させつつ、ポケットから電源の入っていない携帯電話を取り出す。

「俺だ、今、敵の要塞…… ああ『不可視の要塞』に到達した……、

サイレント・ナイトストーリーカー

今より『沈黙の追跡者』作戦を開始する。 ああ、任せろ…… ミスも

ぬかりも一つもない。……では、また連絡する。 炎の導きを…… ア

アイ・キャンセラーズ・フォートレス

ンバサ」

一人芝居でいくらか落ち着いた尚紀はポケットに携帯を捻じ込み、服屋へと入る。

そして真つ先に向かうは女性下着コーナー。

見事な直角カーブで最短距離を進み、まるで予めコースを予定していたかのような動きで女性下着コーナーへと尚紀は食い込む。

もちろん、その途中でカゴを手取るのも忘れない。

そして次に行うのは目に付き、そしてあの少女のサイズと合うであろう下着を無造作に二枚ずつ取っては買い物カゴへとぶち込む。

そんな作業を約二分ほど続け、合わせて約三十六枚ほど適当にぶち込んだあと、再び見事な直角カーブと斜線移動によりカウンターへと進む（ちなみに尚紀の独断で上側の下着はぶち込まれていない）。

「あ、あの。お客様……？　こ、此方の商品は……」

無表情でそんなことをやってのけた尚紀へと、実は入店時から様子がおかしいと思つてずっと見ていたカウンターの向こう側の店員は若干引き気味で何かを言おうとするが、尚紀の表情を見てどもつてしまう。

しかし、まあ。

店員がおかしく思うのも当然であり、必然である。

幼児用のものを買うならまだしも、今回尚紀が買いものカゴにぶち込んでいる下着類のサイズは明らかに思春期真つ盛りの少女達用のサイズ。

思春期真つ盛りの少女、ということとはつまり、自分で下着を選ぶのが当然の年頃であり、尚紀のような父……あるいは兄当たりに該当しそうな人間が買う商品ではない。

よって、考えられる用途は非常に変態チックなものだろう。

「これが欲しいんです」

だが、そんな女性店員の視線にも尚紀は怯まず、トーンの変化がない一直線の声で言う。

「で、ですが……お客様……？」

「これが、欲しいんです」

「お、おきや」

「欲しいんです」

「う、合計で34920円になります」

最終的には尚紀の気迫に押された女性店員はようやく引き下がる。尚紀は内心勝利の味をかみ締めつつ、財布の中から尚紀は五万円札を取り出し、カウンターへと静かに置く。

そして沈黙を決める尚紀。……ちなみにカウンターの店員はちよくちよくチラチラと尚紀の顔色を伺っていた。

しばらくの沈黙が過ぎ、会計が終了し、店員が大きな目のビニール袋に下着類を全て入れ終わり、尚紀に渡した瞬間。尚紀は再び、どこぞの頭文字が四番目のアルファベットになっている漫画も青ざめるドリフトテクを多用して服屋から飛び出す。

「……………」

飛び出た尚紀はゆっくりとポケットから携帯を取り出す。
そして、耳へと当て――。

「ああ、俺だ。作戦は無事成功した……。……ああ、惜しいヤツを無くしたがな。『偉大なる一枚』……ヤツは素晴らしい戦士だった……三十六体の『垣間見える魅力』を洗脳し、砕け散ったよ……、

ああ、ああ……何時までも落ち込んではいられない、か……。安心しろ。俺を誰だと思っている？ ……ふっ、そうだ、俺は俺だよ。ではな、また連絡する……。炎の導きを……。アンバサ」

—— お決まりの一人芝居をした。

それを終えると、ポケットへと携帯電話を突っ込み、再びマウンテンバイクへとまたがる。

そして、先ほどの足が攣った際のダメージもあるために今度はゆっくりと漕ぐ。

結果、家に着くまでに約三十分掛かったのは言うまでもない。

01 - 親方、裏庭に女の子が（後書き）

……あれ、今回もゆるほわ貪食系になってないぞ……？
ゆるほわ貪食系がどんなのかは知りませんが。

02 - 片道切符（前書き）

本来作成してた二話が不慮の事故で消え去ったから急遽書き上げた
……これはそんな話です。

02 - 片道切符

私は一度も腹が満たされたことがない。

ゴミを食っても、ヘド口を食っても、岩を食っても、生者を食っても、死者を食っても、不死者を食っても、何を食っても。

『満足』というモノを味わったことがない。

私は気付いた時には薄暗く薄汚く瘴気に満ちて正気を失う世界に閉じ込められていた。

何もすることもなく、何をできるわけもなく。

永遠とも呼べる空白の時間。

ついには痺れを切らして、辺りの物を口にしてみた。

もともと食物ではなかったのだからうけど、あまりの不味さに吐いた。

でも、しばらくしてみて再び口にしなくなった。

今度は吐かなかった、でも、代わりに『餓え』が襲ってきた。

餓えて餓えて餓えて餓えて餓えて餓えて。

いくら食ってもいくら食ってもいくら食っても。

一切満足しない、できない。

貪って貪って貪って――。

瘴気に飲み込まれて、蝕まれて、水面に映る私の姿は日に日に悍おぞましい物へと豹変していった。

小人共は見た目を重視するらしいが、古竜の子孫である私には関係のないことだ。

そう思って毎日毎日貪る。

そんな生活を続けていたところ、ある日を境に私の元へ小人共が現れるようになった。

命知らずの馬鹿共か、それとも自信家が身を滅ぼしに来たか。どちらにせよ自殺願望者に違いはない。

食って食われるこの世。死にたがりの能無し共は食ってやろう。

私は即座にそう判断し、ここ最近で最も悍しくなった胸部から腹部にかけての大口で食らってやった。

味も何もわからないが、食い千切る感触と、抵抗する相手を蹂躪し、己の糧とする『狩り』に似た感覚が実に私を楽しませた。

そして最も幸いだったのが、その小人共は何度殺しても蘇ることだった。

その場で、とはいかなかったが、一度食った奴でもその後しばらくすれば再び私の前に顔を出した。

何がしたかったのかは全くもって分からなかったが、私としては非常にありがたいことだった。

小人が来ては食らい、小人が逃げては食らい、小人を見つけては食らい。

そんな生活を一週間も続けた頃には小人共が主食になった。

時には三十人程度という大勢で現れる奴らもいたが、何ら問題なく食らった。

そして、そいつらを食らって分かったことが一つだけあった。

小人共を食らうと、たまに黒い精が姿を現すことがある——た

しか、小人共は人間性とか呼んでいたか。

それを食らえば、私にしては珍しく多少満たされたような感覚を覚えた。

『これが、満たされるということか』と思うと同時に『また知らないことを覚えた』とも思った。

実質的には後者の考えが非常に正しかった。

それから毎日『人間性』を求めては殺戮を繰り返す日々。

だが、一向に小人共は人間性を落とさず、苛立ちも募るばかり。

そんなことを繰り返している内に、人間性は強者や聖者……伝説上の人物などに多いということがわかった。

元々は小人共の伝説になど興味のなかった私だが、動かぬ古竜たちが互いの情報を交換し合うために使っている、特定周波数の魔術を拾い（私が瘴気に蝕まれたせいかどうかは知らないが、断片的にしか拾えなかったが）、小人共の情報を集めた。

結果として、どうやら小人共は私が数日前に飲み込んだ鍵や、私の尾に眠っている武器（もっともそんな物を眠らせている気など毛頭ないのだが）などを狙っているらしいことが分かった。

だが、そんなことがわかって私には無駄だった。

何せ、私は忘れるような過去に辿り着いたこの大広間から外に出られないのだから。

苛立ち。

苛立ちばかりが募る。

人間性は全く得られず、最近では殺した小人共を食らうこともやめ始めている。

食らうのも腹立たしい。

そう、思っていた日々――。

その日々は、いつ終わったのだろうか。

意外と早かったかもしれないし、遅かったかもしれない。

よく、覚えてはいないが。

半分以上忘れかけているが。

あの、騎士を殺した瞬間に――。

「……んう……？」

ゆつくりと瞼を開ける。

それと同時に途方もない疲労感と空腹感。

苛立ちは――それほどない。

だが、それに代わって『驚愕』があった。

天井が、白い。

菌糸が蔓延り、ヘドロがこびり付き、死肉が垂れる見慣れた天井じゃない――。

いや、それ以前に『眠る』こと自体が久しぶりだった。

天井が白い――。

しかも、それだけじゃない。

地面が、柔らかく、暖かい。

更には軽く、それでいて暖かい何かが私に覆いかぶさっているようだった。

驚愕の連続。

あまりにも驚く点がありすぎて、どれから反応したらいいのかわからない。

「やつと目覚めたか……」
グッナイ・ホワイトプリンセス
『眠れる白姫』よ……」

そんな驚愕の連続に襲われる中、横から聞きなれた小人の声が聞こえた。

また私に食われに来たか――？

そう思っただけを見れば。

――小人じゃなくて大人だった。

でかい。

私のサイズから考えれば相当な大きさだ。

私がすっぽりと収まるサイズが大聖堂一個分程度なので、私を遥か上から見下ろしているコイツは小人共からすれば顔が伺えないほど巨大であろう。

あまりのサイズに今までに一度も感じたことのなかった『恐怖感』というものを感じた。

そうすれば、自然と後ろに下がって――。

「あ、バカ、そっちは――」

直後。

視点が大きく上を向くのと同時に、後ろへと引つ張られる。

「んひゃあつ!？」

瞬く間の浮遊感。

そして、背中に衝撃。

痛みは感じないが、何が起こったか未だに整理がつかない。

……そんな私へと、世界は無情にも追撃を掛けた。

半透明の壁に移る姿——おそらく私の姿——。

それは、以前に食らい食らった小人共のモノとなっていた。

——あ、なるほど。アイツが大きいわけじゃなくて私が小さくなっただのか。

……て、納得できるかつ!？

「は……? あえ? え? は? あ?」

とりあえず体の向きを正常に戻し、立ち上がるうとする。

が、上手く立てず、半透明の壁に体を押し付ける形で立ち上がった。

……そうだ、小人共は足が二本なんだった。

なんて抜けたことを考えつつ、半透明のカベに映りこんだ自分の姿をマジマジと見る。

足はかなり細く、元の私が触れたら簡単に折れそうなほど。肌の色は非常に白い。脂肪ぐらいは白いんじゃないだろうか。

腰周りも細く、何とも栄養が足りていない感じた。……小人共の基本的な体系がどうか知らないが。

それと、何故か腰にのみ衣類が着けられている。青と白の縞々模様の逆三角形の物体。……なんだこれは、護符か何か。まあいい。

おそらく何の力も感じないあたり何もないのだろう。

次に腹部……らしいところを見て、そのまま胸部……？　へと視線を移す。

見事はない。

私の象徴であり、誇りでもあった大口が。

数々の英雄気取りの能無し共を胃の中へと送った牙が。

……なぜだ……なぜだ？

腹部は押してみれば中々の弾力。

胸部はなぜ存在するのか分からない小さい膨らみと、その頂点に新鮮な肉のような色合いの突起。

で、そこから更に上に上って……顔。

私の唯一の汚点であった『竜の出来損ない』である『蛇』に似ていた顔——。

——うん、普通に小人共の顔だこれ。

ただ、よく整ってはいると思う。小人共の顔をいちいち見ていたワケではないが。

そしてかつての私のウロコように光の反射によって鈍い紫に輝く黒髪。強酸性の液体のような毒々しい黄色の瞳——。

これが、私の全貌だった。

「はぁ……！？　ハアアアアアアアアア！？」

あ、それと声も小人と同類のモノになっていた。当然か。むしろここまで来て声のみが元と同じだったらおかしい。

「ど、どうした？　何かあったか？」

余りにも突然に私を襲った激変に、私が散々に混乱していると後ろの小人が私へと話しかけてきた。

……そうか、この男だ。この男に違いない！　こいつが私の姿を

変えた、そうだ。そうと考えれば納得が行く！
勢いよく後ろを振り向き、男の顔を指差す。

「お、オマエだなッ！？ 私をこんな姿にしたのは！ 呪術師か？
しかし、貴様。私をこんな姿にして……何を考えている？ 陵辱
でもする気か？ ハッ、やはり能無しの小人共は考えることは分か
らん！ いいか、とりあえずだ！ 私を元の姿に戻せ！ 今すぐに
だ！」

私の完璧かつ完全な推理が命中したことに呪術師は大変驚いたよ
うで、目を丸くしてこちらを見ている。

……まさか本気で陵辱するつもりだったとは……。
私が男になったらどうするつもりだったんだ、こいつは？

「クッ……、クククッ……中々の推理だ……。だが、違う。俺は貴
様を擬人化させた挙句に陵辱しようなどと一切考えていない。……
俺は貴様から力を借りようとしたただだ、そう『一貪食なる古龍の
子孫（ゲイピング・アトモスフィア・オールドドラコーン）』であ
る貴様と契約することによってなあ……」

気味の悪い笑い声と共に男はそんなことを言ってくる。

契約……？ 契約だって？

まさか、そんな馬鹿な。

確かに、小人共には時折古竜に祈りを捧げ、古竜の特権である『
朽ちない体』を得て、生命の超越を目標とする奴らもいる……とは
聞いたけど。

まさか。

私と契約しようとなんて……。

別にできないワケじゃない。私だって一応瘴気に蝕まれてるとは
いえ古竜だ。

だが……。

「……貴公、どうなるか分からんぞ？」

そう、どうなるか分からない。

基本的に『契約』というのは契約者へと近づく為のモノ……だと聞いた気がする。

何処かに隠れている『暗月の神』なら、暗月の神の象徴である『復讐』をひたすらに繰り返すようになるし。

何処かに閉じ込められている『ダークレイス』なら、手当たり次第に他人の世界に侵入して殺戮を尽くすし。

何処かに眠り続ける『最初の死者』なら、周囲の世界に災厄をばら撒くし。

……まあ、他にも人間同士とか化け猫だとか、衰弱したデーモンだとか神の幻だとかと契約する奴もいるみたいだけど……そんなのは知らない。あんなのは所詮『ごっこ遊び』だ。

で、話を元に戻すが。

私と契約する。

……どうなるんだ？

やはりあれだろうか、他の古竜と同じような感じになるのだろうか。

それとも『貪り続ける者』とか呼ばれるようになるのか？

……それ以前に私は何を求めればいいんだ？

追記すれば、契約した相手には予め一品の『献上物』を決めておき、それを一定数献上した契約者には力を貸す……というルールもある。

私が欲しい物……、うん。人間性だな。あれを食うと満たされる。

「フツ……今更この身、どうなろうと構わんさ……、ただ、どうせなら闇に吞まれる前に吞んでやろうと思ってなあ……」

とかなんとか色々と考えていたが、どうにも男はどうしても私と契約したいらしい。

……仕方ない。

契約しなければ元の姿に戻してはくれないだろう。

「なら、跪け」

私が地面を指差すと共にそう言えば、男はゆっくりと跪く。

……。

……。

契約ってどうやるんだっけ。

いや、知らないワケではない。忘れたダケであってだな……。断じて知らないワケじゃないぞ。本当だからな。

……まあいいか、たぶん大丈夫だろう。

互いが契約してると思ってれば……。

「よし、もういいぞ。これで貴公は今日から『貪り続ける者』だ」

「ほう、なるほど……さしずめ『貪り続ける者』^{ニースヘッグ}といった所か……

……。で、名前は？」

………うん？

男の様子が急に変わったぞ。何だ？ 二重人格か？

それに名前ってなんだ。意味が分からないぞ。

「………何？」

「だから、お前の名前はなんだ。と聞いているんだ……」

………うん？

名前？

こいつは何を言っているんだ。

古竜に個別の名前などあるわけないだろうに。

……脳みそまでカビてるのか？

「名前など無い。……何せ私は古竜の子孫だからな」

「……もう乗らんぞ、ほら、さっさと自分の家に帰ったらどうだ？」

……んん？

自分の家……って、あの大広間か？

……いやいや、どうやってここに連れられて来たか分からないし。
というか、あれ家か？ いや、違っだろう……。

それ以前にこいつ……自分で召喚ホストしといて帰れとは。ゴミ召喚主
だな。

「……家も、ない」

「……何？ じゃ、じゃあ両親は？」

両親……？

古竜にそんなものが居るわけないだろう。

こいつはこんな中途半端な知識で私を呼び出したのか？ ……こ
んな見た目にしてまで。

信じられんな。

「親など居るはずがないだろう」

「なあっ……！？」

男がものすごいショックを受けたような顔をする。

……何をそんなに。

元々古竜とはそんなものだろう？

「……本当に名前もないのか？」

「だから無いと言っている……。それよりも早くもとの姿に戻してくれ、こんな情弱な姿で過ごしたくはない」

「元の姿つて……、何だ、それは」

「なっ……！？ 貴様、自分から変えておいてそれはないだろう！
？ 私の本来の姿だ！」

私が再び男を指差しながら言うと、男は顔を引きつらせて固まっている。

……なんでそんな顔するんだ……？

まるで、そんな顔されたら……本当に何も知らないみたいじゃないか。

「……恐らく、だが。その姿を俺は見えてない」
「な、何を……」

不安が生まれる。

それと同時に。

何か、とても重要なことを忘れているような……。
そんな感覚に陥る。

「君は、家の裏庭に倒れていたところを……俺が拾ったんだ」
「は……？」

うら、にわ？

……。

ゆっくりと思い出す。

白い世界で。

私が見た文を——。

「——人間となり、別の世界へと侵入します——」

——ああ、なるほど。

そういう、ことが。

落ち着いて外の風景をしてみる。

……明らかに違う。

何も、かもが。

……。

恐らくここは、ロードランの地ではない。

ロードランの地がブレて出来上がった平行世界でもない。

そのロードランの地とその周辺の世界を一括りにし、そこから離れた大きな括りの世界だ。ここは。

古竜も。

怪物共も。

不死者も。

神も。

私の知るモノは何も存在しない場所、そう。きっとここはそんな場所だろう。

「は、はは……」

思わず崩れるように座り込む。

何故だ？

何故……？

どうして、こんなことに……？

02 - 片道切符（後書き）

おかしいな、ゆるほわ貪食系じゃない。

……ゆるほわ貪食系がどんなものか知りませんが……。

03 - 裏側（前書き）

二話の尚紀視点。手抜きとも言つ。

03 - 裏側

俺はただ、部屋の中で椅子に腰を掛けて休んでいた。

……昨日の晩は散々だった。

結局俺はあの後買ってきた下着を少女へと着せ、更にはボロボロになった足で少女を背負って二階まで運び、ベットに寝かせた。

それでようやく一安心し、すこし眠りについた後、必要はないと思うが、少女が記憶喪失だったり（こちらはワリと考えられるかもしれない）転生者だったり（こちらでも否定できない、何せ真夜中に全裸で美少女が裏庭に落っこちているなど常識の範囲を既に超えているからだ。決して俺が厨二病だからではない）した場合のことを考えて三週間分の有給を取った（この時つくづく普段使ってなくて助かった、と思った）。

ちらり、と横を見る。

そうすれば未だに死んだように眠る少女。

……脈はあるから死んではないのはわかっている。

だが、どう見ても死んでいるようにしかみえない。

「……んう……？」

と、そんなことを思っていたところ。

少女が目を覚ました。

喜び、そして同時に不安も覚える。

もしも少女がマトモな少女だった場合……俺はナニカサレる。通報的な意味で。

だが、今更引けない。やるしかない。

「やっと目覚めたか……」
グッナイ・ホワイトプリンセス
『眠れる白姫』よ……」

適当な名前で呼びつつも、立ち上がって近寄る。

少女は強酸性の液体のような毒々しい眼でこちらを凝視していた。そしてその表情は驚愕。

……あ、これ。ダメなパターンでしょうか？

そう思った矢先、最悪にも俺の考えは的中していたようで……少女は勢いよく後ろに下がり、俺から距離を取ろうとするが――。

「あ、バカ、そっちは――」

「んひゃあっ!？」

――俺の制止の声も空しく、盛大に落っこちた。

一瞬の間があつて、ごどん、と盛大な音。

……恐らくは背中を強打したのだらうな。……俺なら十分は悶え続ける痛さだ、きつとこの少女も悶えるに違いない。

と、思ったが。少女は落ちたときの体勢のままガラスを凝視したまま硬直していた。

……何を見てるんだ？

そう思つて俺もガラスを覗いてみるが、ガラスの向こう側はいつも通りの平和的かつ退屈な光景。

が、どうにも少女は町並みを見ているわけではなく、ガラスに映つた自分の顔を見て硬直しているらしかった。

……雲行きが怪しくなってきたな……。

「は……？ あえ？ え？ は？ あ？」

短く息を吐くような声を出しながら少女はガラスへと体を押し付けつつ、立ち上がる。

まずい。これは面倒なことになったかもしれない。

……とりあえずマトモな終わり方はしなさそうだ。

そう思いながらも少女の様子を伺うと、ペタペタと自分の体を触

りつつガラスに映りこんだ姿を見て確認しているようだった。

「はぁ……！？ ハアアアアアアアアア！？」

そしていきなりの叫び声。

思わず心臓が止まるかと思った。

……本格的にこれはまずい空気だ。絶対これはマトモなシチュエーションじゃない……。

通報されてもいいから普通の展開がよかった。

「ど、どうした？ 何かあったか？」

恐る恐る聞いてみると、少女は勢いよくこちらを振り向き、俺を睨んでいる。

敵意——というより殺意を剥き出しにして。

……どうやってたらそんな可愛い顔でそこまで恐怖感を煽れるんだ！
そう思っていると、少女は俺の顔を指差してくる。

「お、オマエだなッ！？ 私をこんな姿にしたのは！ 呪術師か？
しかし、貴様。私をこんな姿にして……何を考えている？ 陵辱
でもする気か？ ハッ、やはり能無しの小人共は考えることは分
らん！ いいか、とりあえずだ！ 私を元の姿に戻せ！ 今すぐ
だ！」

物凄い饒舌でよくわからないことを言われた。

陵辱。しねえよ。俺は親父とは違うんだから。

というか、呪術師？

……ああ。

この少女も俺と似たクチか……。

少し乗ってやるか。

「クツ……、クククツ……中々の推理だ……。だが、違う。俺は貴様を擬人化させた挙句に陵辱しようなどと一切考えていない。……俺は貴様から力を借りようとしただけだ、そう『一貪食なる古龍の子孫（ゲイピング・アトモスフィア・オールドドラコーン）』である貴様と契約することによってなあ……」

気持ち悪い笑い声と共に適当な設定を広げてみる。

これで満足か、厨二病患者（仮）の少女よ。

「……貴公、どうなるか分からんぞ？」

少女が疑うような表情で言い放つ。

……満足してない！？

むしろ乗って来た！？

どういうことだよ……。

仕方がない。もう少し乗ってやるか。

「フツ……今更この身、どうなろうと構わんさ……、ただ、どうせなら闇に吞まれる前に吞んでやろうと思ってなあ……」

自分で言っていて相当イタい。

……だが、これで少女も流石に引いただろう。そしてこの茶番も終わるだろう。

そしたら後は適当に名前とか聞いて家の場所聞いて。遠いようならどこかの施設に頼めばいいし、近いなら俺が送って行ってもいい。

「なら、跪け」

……終わらなかった。

地面を指差しながら少女はそんなことを言う。

こいつ、おそらく相当重症だ……。

だが、きつとやらないと満足しないのだろうから跪く。

……中学三年か高校一年くらいの少女に跪かされている……親父なら狂喜乱舞しそうなシチュエーションだ。

そして沈黙。

「よし、もういいぞ。これで貴公は今日から『貪り続ける者』だ」

……え、終わり？ 詠唱とかするもんだと思っていたが……。

よくわからん。

しかし、これでもう満足しただろう……。

「ほう、なるほど……さしずめ『^{ニースヘッグ}貪り続ける者』といった所か……

……で、名前は？」

流石俺だ。

物凄く違和感がある感じに聞いた。

少女も目を丸くして固まってるし。

「……何？」

「だから、お前の名前はなんだ。と聞いてるんだ……」

案の定聞き返してきたので、言い直す。

だが、少女は未だ目を丸くしたまま固まっている。

「名前など無い。……何せ私は古竜の子孫だからな」

……また厨二病かつ！

しかし、乗ると永遠に終わらなさそうなので、乗りはしない。

「……もう乗らんぞ、ほら、さっさと自分の家に帰ったらどうだ？」
多少突き放しすぎただろうか。
自分でも多少思うが、俺は何分人と話すことに慣れてない。
しかし、これで少女もきつと――。

「……家も、ない」

――何？

まで。やはりおかしくないか？
先ほどとは違い、静かな混乱に見舞われているような表情をする少女に、俺は違和感を抱く。

やはり、正常なシチュエーションじゃないのか？

「……何？　じゃ、じゃあ両親は？」

「親など居るはずがないだろう」

「なあっ……！？」

平然と、それが当然のように言う少女。

……やはりおかしい。

「……本当に名前もないのか？」

「だから無いと言っている……。それよりも早くもとの姿に戻してくれ、こんな情弱な姿で過ごしたくはない」

『もとの姿』。

先程と同じ風に聞けばただの厨二病だと思うが、どうにも少女の声色は面倒くさそうであり、演技や嘘を吐いている風には見えない。

「元の姿って……、何だ、それは」

「なっ……！？ 貴様、自分から変えておいてそれはないだろう！
？ 私の本来の姿だ！」

もはや不安で満たされ、乗る気にもなれなかった俺が普通に返したところ、少女は焦ったような表情を浮かべつつこちらを指差してきた。

その表情は焦りと不安。

「……恐らく、だが。その姿を俺は見てない」
「な、何を……」

ゆっくりと、静かに返す。

少女はショックを受けたようで、自分の頭を自分の手で押さえながら、震えている。

……なんだこれは？

「君は、家の裏庭に倒れていたところを……俺が拾ったんだ」
「は……？」

少女が涙声で返す。

……なんだこれは？

「は、はは……」

しばらくして、少女は崩れるように座り込み、俯いてしまう。
どういう……ことなんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709y/>

貪食IS-Gaping IS-

2011年11月21日07時55分発行